



青年地域活動八年の歩み

保原町教育委員会



わがまちのしゃかいきょういく

はじめに

本誌昭和五十一年七月号「わが町の青年教育」の中で、

○若者によるふるさとづくり事業
○中央青年学級の運営
○青年団体リーダー養成事業
の三点について、その事業の概要を紹介したので、今回はこれらの事業の経過とその後の成果について要約してみる。

一、中央青年学級の発足とその成果

昭和四十六年当時は景気絶頂のときで、若い労働力は都市企業に吸われ、町に残った青年たちは意気が上がらず活動もとだえがちで、地区青年学級への入級者は激減、やむなく中央青年学級一本とした。

当時、中央公民館運営審議会が行った「わが町の青年を私はこう見る」のアンケート調査には、

- ・ 自分のことしか考えず、生活行動にモラルが欠けている
- ・ 金と物とが幸福の最大条件だ……とする風潮が強い
- ・ 進んで学習や研修に参加する意欲に乏しく、単におもしろいやや得をすることに興味を持つ者が多い
- ・ 単純な判断を好み、思慮深い行動を嫌う傾向が強い

- ・ 自然や生物への愛情に欠ける
- ・ 社会秩序を無視した言動が多い
- ・ 義務、責任、秩序、道徳、節約、奉仕などの言葉にさえ抵抗を感じるふうがみられる

行政には特に無関心で、政治意識は極めて低い

こうした実情を踏まえて、青少年教育を公民館事業の中核にすえて、まず青年学級をリーダーづくりの場とするため、学習内容を整備して「青年学級生手帳」を編集し、生徒の自主活動を盛り上げるなど、その運営に全力を投入した。

幸いにして入級する青年には優秀な者が多く、二か年間の学年制を定着させ、青少年教育実技指導者を認定し得る単位を習得するまでに成長し、学級終了後は各種の団体やサークルに参加して、やがて、そのインリーダーを つとめ、健全な活動への大きな誘導力



座禅体験 宿泊訓練風景

となった。

二、ふるさとづくりの発足と経過

ふるさとづくり事業の県指定を受けた昭和四十八年度の「ふるさとづくり企画委員会」の青年地域活動に対する意見書にはこう記されていた。

- ・ 本町には二千人を超す未組織青年がいると推定されるが、これを減らす施策が必要だ。
 - ・ 青年の流出の激しい地区ほど住民に活気がない。何よりも地区青年団の復活が必要だ。
 - ・ 青年のサークルは割合に多いが、みんなばらばらで、会員としての自覚も足りない。……連帯意識を育てる施策が必要だ。
 - ・ 青年団体のインリーダーづくりをさらに強化する施策が必要だ。
 - ・ これらの対策は、できるだけ青年自身の手で企画し実施させたい。これを受けて、町内の青年団体や職場からの代表三十六名で「ふるさとづくり実行委員会」を結成し、下部組織の意見を吸い上げながら、活動の内容を次のように押さえた。
- 1、独りぼっちの青年をなくすための事業
 - 2、他団体やサークルの活動をお互に理解し合うための事業
 - 3、われわれの一人一人が正しく成長するための共同研修事業
 - 4、われわれの成長を妨げる悪い社